

令和8年度 第1回宇和島市発達支援連絡会 会議録

日 時	令和8年8月21日（金） 13:30～15:00
場 所	宇和島市発達支援センター 研修室
出 席 者	委員：委員長 外13名（2名欠席） アドバイザー1名 事務局：7名
協 議 内 容	
会議次第・資料等については別紙参照 担当者説明については省略 1 開会 ・事務局より配布資料確認 ・協議内容の公開について 2 主催者あいさつ 福祉課長 本連絡会は、各機関が連携してライフステージを通じた切れ目ない発達支援体制の構築を目指している。発達支援は特別な支援ではなく、すべての子どもが自分らしく育つための子育て支援そのものである。個性や多様性を認め合い、地域全体で安心できる環境を整えることが重要。昨年度よりワーキング部会では、早期発見・対応に向けた支援の空白期間をなくす連携を検討しており、本日はその経過報告をもとに意見を交わし、より良い発達支援の体制づくりに向けて共に歩みを進めていきたい。 3 委員・アドバイザー紹介・あいさつ 4 議事 進行：委員長 （1）令和7年度までの取り組み （2）令和8年度発達支援連絡会ワーキング部会の取組 ※資料1に沿い、事務局より説明。 〈ワーキング部会委員より各機関での取組報告〉 （保険健康課） 宇和島市は今年度の母子保健活動において、5つの取組を考えている。 1. 健診後の支援の充実：1歳半から5歳児健診での臨床心理士や言語聴覚士等専門家による個別相談の充実。 2. 課題改善：新任保健師を支える班体制・他機関との協働による組織的支援など一人で抱えない体制を徹底し、よりよい支援につながるようにする。 3. 保護者に寄り添う支援の継続。 4. 自己研鑽：新任保健師の研修強化。 5. 5歳児健診におけるニーズへの対応：就学不安への相談ニーズが増えてきたため、	

教員等専門家による就学相談を拡充する。

（公立保育所・認定こども園）

公立保育所・認定こども園では、新年度の異動に伴う課題を解消するため、全職員で園児や保護者を知ることが意識されている。園全体で、保護者とのコミュニケーションを通して不安や悩みの声を取りこぼさず大切に聞かれる体制づくりに取り組んでいる。今年度は組織として取り組めるよう、保育協議会でも意識統一を図り、発達支援に関する市の動向やワーキング部会の内容についても共有した。また研修の年間テーマを「感覚統合」とし、各部会や園内研修を通じて実技や知識を共有し学びを深め実践につなげている。保育主任を特別支援教育コーディネーターに位置づけ、園全体をチームとした、一人一人を大切にする支援体制の充実を図っている。

（私立幼稚園）

私立幼稚園では、7月に教師会で「アタッチメントによって育まれる心豊かな成長」をテーマに研修を実施し、教師が子どもの「安心安全基地」となり、個性や課題を見極めるアタッチメントの重要性を学んだ。園ごとに職員数や手段による違いにより内部の情報共有に課題があるよう。当園では口頭から文字による記録での共有へと改善を進めている。もう一つ保護者同意の課題が依然続いている。保護者から支援の提案を断られる現状もあるが、言葉の裏にある思いに寄り添い、粘り強く関わるのが大切だと考えている。今後も情報を共有し続けながら、共通の課題を見出していくアプローチを継続していく。

（3）令和8年度発達支援連絡会ワーキング部会からの気づき

※資料Ⅰに沿い事務局より説明。

（4）意見交換

（委員長）

事務局より、今年度は連携フローを策定する前段階として、支援の共通基盤、土台を作る必要性についての提案がなされた。この事務局の説明を踏まえ、共通して大切にしたい土台について委員の率直な意見を伺いたい。

（委員）

令和7年度の取り組みに非常に感心し、また嬉しく思っている。保護者が支援者に一番望むのは、「対話」である。保護者の思いと支援者の思いは多少違う。子どものありのままの姿を受け入れるよりも、みんなと同じようにできることを目標にされているように強く感じる。療育や医療機関につなぐことの前に、まずは親子の状況や思いを受け止め認めた上で、日々の関わりの中で共に考え、一緒に取り組んでもらえることを望む。保護者側の反応への懸念の意見もあったが、園や学校からの連絡が、問題点の指摘や一方的な相談だと、警戒心が強まったり、どうすればよいか分からず困惑する。実際学校からの連絡は恐怖だった。そのため、日頃から子どもの良い話を共有して良好な関係を築き、具体的な提案を交えながら肯定的なコミュニケーションをとっていただけるとありがたい。

（委員）

療育施設への通園はゴールではないと思っている。子どもの成長を見守りながら保護者に寄り添い話を聞き、その思いを大切にしながら取り組んでいくことが重要であると考え、職員の経験値に差があるため、研修を通じて傾聴や必要な機関へ繋ぐスキル向上を図り、全員で家族をサポートできる体制を目指している。隣接する発達支援センターや学校教育課との連携も増えており「顔が見える関係性」を大切にしながら、多様な悩みに耳を傾け、包括的な家族支援体制を構築していく意向である。

（委員）

最初に提案されている、「みんなで、土台を共通して」というところには、大賛成で大変納得できる内容だと思う。支援者を一人にしないという取り組みについて、学校が抱える集団指導の難しさやしんどさは学校内で完結しがちである。これを解消するには、学校を開放して多様な職種に現場の困難な状況を見てもらい、互いの立場を理解し合うことが不可欠である。机上の議論にとどまらず、実際の現場を見ながらネットワークを構築することで、保護者との対話も含めた共通の土台作りがより円滑に進むと思った。

（委員）

この会に参加させていただいて、いろいろ学ぶことが多かったように思う。事務局より最後3つの提案があったが、共通にしたい土台についての趣旨についてはすごく賛成であるし、この方向で向いていくべきだろうと思う。不登校支援の現場において、主要な窓口となる学校や担任教員が抱える悩みは深い。支援の結果を出すには、本人の支援や保護者への配慮はもちろんであるが、それだけでなく、学校との連携が不可欠である。間に入る我々がどう対応するかが肝心。時間をかけて関係性をほぐし、仲介役としてできる支援を行っていくことが重要となる。立場や施設により比重や厚さ等が異なるため対話を通じて各機関の認識の差を繋ぐことが大事。我々も柔軟に連携の輪に加わっていったらという思いがある。

（委員）

園では今年度、担任一人で抱えないよう、園全体で一人の子どもを支える体制を重視している。担任の孤立や不安の抱え込み、行き詰まりを防ぐため、全職員で話し合い、支援の方向性や保護者との関わり方を共有するようにし、不安を解消しながら組織として最適な支援の方向性を見出す取り組みを進めている。職員間の対話と保護者との対話をともに大事にし、全職員がその子どもに関わる形をととても大切にしている。

（委員）

対話の必要性は、保護者と支援者間だけでなく支援者同士にも当てはまる。切れ目のない支援や就学時の円滑な橋渡しには多職種の連携が不可欠である。保健師や保育士、教員など各職種の専門性や利点を相互に理解し、役割分担をすることが重要となる。さらに保護者も子どもを支える支援者の一員と捉え、お互いの強みを活かしながら全員で一丸となって子どもの成長を支えていく協働の体制が取れたらよいのでは。

（委員長）

事務局からは、みんなで大切にしたいこととして「対話すること」が提案された。当

事者や家族、支援者同士の関わりの中で何を大切にしているか、委員の皆様からもぜひ改めて意見を聞かせてほしい。

（委員）

支援対象者と同じ立場にはなれずとも、近づく努力、知ろうとする努力を常に怠らない姿勢を大切にしている。「寄り添ってまで求めない」という方への対応など、自身の考えが及ばず解決策が見つからないことも多い。だからこそ、自分たちも日頃から周囲に力添えを頼み、相談できる場所や相手を確認しておくことが重要である。それが当事者への本当の支援や好転に繋がると信じ、自省を交えながら日々の実践において心がけている。

（委員長）

自部署で解決できない問題の相談先とは、まさにここに集まっている各機関のことでよろしいか。

（委員）

それぞれ分野によつての違いはあるが、隣の委員に相談ということも当然ある。ケースバイケースで変わってくる。

（委員）

皆さんの意見を共感できる部分がたくさんあると思って伺っていた。対話をすることを大切にしていくなのはすごく大事なことだろう。自分自身も意識しながら取り組んでいきたいとも思うし、そういうことを気にしながらやっていこうとしてきた部分もあった。それぞれの役割を理解して尊重するということがすごく大事と思っている。個別支援だけでなく、集団生活における本人の姿や多様な関わり方を多角的に捉えるには、各機関の意見を聞き客観視する姿勢が必要である。お互いの役割理解とケースを通じた実践の積み重ねにより、関係性が深まり円滑な情報共有やスムーズな相談体制が構築される。早期の取り組みを継続することは、成人期における支援の広がりや当事者・保護者の安心に直結するため、数年後の変化を見据えた取組の継続が極めて重要である。

（委員）

就労支援の立場では、幼少期からの連携情報が本人の安心できる就労環境で働けることに繋がる。近年、過去の嫌な体験を失敗と捉えられていることも多いことやレッテルが貼られることを懸念し、特性がありながらも支援を拒み、一般就労を望むケースが増えている。そのため、支援を受けることは悪いことではないと感じられるよう、将来への明るい展望を含めた対話を重ねることが重要であり、支援の受容に向けた前向きな社会の流れを作っていく必要がある。

（委員長）

アドバイザーに、支援の共通基盤を作るために、今後どのように進めていくことが望ましいか、ぜひお言葉を賜れればと思う。

（アドバイザーからの助言）

本連絡会は多様な専門性を持つ多職種で構成されているが、共通の基盤は「対人援助職」だということである。対人援助職に必要なのは相手を理解し、適切に伴走するため

のコミュニケーション能力と自己管理能力。傾聴や共感によるニーズ整理と見通しの説明を行う「コミュニケーション」、アセスメントや他職種連携を伴う「専門性と実践」、自己覚知や感情コントロールによる「マインド自己管理」の3要素が求められる。これらをベースに、我が子のありのままを受容することについての理解、悩む保護者の気持ちに寄り添い続けることが、孤立を防ぐ安心感、信頼関係構築の土台となる。

発達支援に関する保護者への伴走支援は指導や助言の立場ではなく、パートナー、伴走者として孤立を防ぎ家族全体を支えること。核心は4点あり、1つ目は親が責任を抱え込まないようありのままを受け止める「心理的ケア」。2つ目は評価ではなく共感。強みを共有し保護者が自信を回復できることをサポートすること。3つ目は理想の押し付けではなく、少しずつ実践できる「生活に即した具体的提案」。4つ目は、多職種が役割を分担し繋がり合う「地域や他機関との架け橋（連携）」になることである。一貫して大切にすべきマインドとしては、子どもを変えるのではなく、子どもが過ごしやすい環境と大人の関わり方を一緒に考えていく姿勢。

信州大学医学部の精神科医本田秀夫医師は、日本社会に根付く「みんな同じ、普通であるべき」という画一的価値観や同調圧力によって、発達特性のある人に過剰適応や二次障害などの大きな負担を与えていると指摘する。また、個人に無理な適応を強いるのではなく、社会や教育の枠組み、価値観そのものを変えるべきだと主張されている。苦手を無理に克服させることは自尊心を傷つけるため、「こうあるべき」を見直し、個性を生かす環境を作り、その子らしさを整えていきたい。私たちもこのことを常に念頭に置いて関わることで、スムーズにつながりが可能になっていくと信じていきたい。これが「連携」となり子どもの育ちやその先の将来にわたる成長へつながっていく。見守りながら、保護者と共に歩むという私たちでありたい。

5 その他

○南予地方局より

南予地方局は、関係機関の連携による支援体制強化を目指し「南予地域発達障がい支援ネットワーク会議」を毎年開催している。今年度は宇和島と八幡浜の2圏域に分けて実施され、宇和島圏域は10月9日に開催される。今回は地域評価ツール「Q-SACCS」の更新をテーマに、市町ごとの強みや課題について多様な分野の関係者が意見交換を行う予定であり、体制充実のため幅広い参加を呼びかけている。

○保険健康課より、お口の元気ミニ広場の紹介

○発達支援センターより、ペアレント・トレーニング「はぐてらす」の紹介

6 閉会

次回は2月末から3月上旬に開催予定
終了。